

## 道徳教材としての「先人の伝記」の適切性と有用性

伊 藤 利 明  
石 村 由利子

### はじめに

道徳教材は、読み物資料を含んでいる。両者は同じ意味で使用されることもあるが、厳密に言えば、道徳教材は読み物資料よりも範囲が広く、写真、絵、ビデオなども含まれる。読み物資料は、短く資料と呼ぶことが多い。読み物資料は長い物語の一部を抜き出したり、短い話にまとめられたりして、児童・生徒に提示される。しかし、どのような「先人の伝記」でも読み物資料として活用できるわけではない。活用するためには、読み物資料として大切なこと、取り上げる時に必要なことを考え、読み物資料の中身を十分検討しておかなければならない。教育学と看護学の知見を活用し、倫理的・道徳的観点から道徳教材の適切性と有用性を検討する。

そこで、本論文では、第1に、小・中学校学習指導要領における道徳教材の中に、「先人の伝記」が含まれることを確認し、教材としての特徴を述べる。第2に、道徳教材としての読み物資料を活用するための前提として、正確さ、時代考証の必要性について指摘する。第3に、二宮金次郎の伝記を例に、道徳教材として活用する時の問題点を指摘する。第4に、先人の伝記を道徳教材として取り上げる時の要件を考察する。第5に、「考え、議論する道徳」への質的転換が目指されているが、「先人の伝記」の有用性について述べることにする。

### 1. 小・中学校学習指導要領における道徳教材としての「先人の伝記」の位置づけ

道徳教材について、小学校学習指導要領は、「多様な教材の活用に努めること」を奨励している。小学校学習指導要領「第3章 特別の教科 道徳 第3指導計画の作成と内容の取扱い 3」では、「先人の伝記」を道徳教材のひとつとして位置付けている。

「教材については、次の事項に留意するものとする。

(1) 児童の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること。特に、生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、児童が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。(以下略)」

また、中学校学習指導要領「第3章 特別の教科 道徳 第3指導計画の作成と内容の取扱い 3」では次のように示されている。

「教材については、次の事項に留意するものとする。

(1) 生徒の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること。特に、生命の尊厳、社会参画、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。(以下略)」

小学校学習指導要領と中学校学習指導要領を比較すると、題材の例は、「社会参画」が異なっているが、「先人の伝記」は、小学校と中学校の両方で取り上げることになっている。この「先人の伝記」は、従来から使用されていた道徳教材のひとつである。

道徳の授業で、伝記又はその一部を児童・生徒に示すために、読み物資料が利用される。『わたしたちの道徳 小学校一・二年』では、二宮金次郎、アンリ・ファーブル、長谷川町子、『わたしたちの道徳 小学校三・四年』では、リンカーン、葛飾北斎、『私たちの道徳 小学校五・六年』ではアニー・サリバンが取り上げられている。中学校では、上杉鷹山、加納治五郎などがコラムで紹介されている。『『特別の教科 道徳』の教科書検定について（報告）（2015年（平成27年）7月23日、教科用図書検定調査審議会）』では、「具体的にどのような課題を教科書で取り上げるかは教科書発行者の創意工夫に委ねられる」としている。今後、さらに新たな人物や題材が取り上げられるであろうが、すでに評価の定まった先人の生き方や思想は、道徳教材として選びやすく、学習課題を具現化するものとして扱いやすい特徴を持っている。

読み物資料は、従来の登場人物の心情理解だけに偏ることなく、思考力、人間性を育成するための有用な資料となる。問題解決型の学習や体験学習を取り入れるなど、授業の工夫が求められる。

## 2. 道徳教材として読み物資料を活用するための前提

### (1) 正確さと時代考証の必要性

読み物資料はできるだけ歴史的事実に基づいた正確な内容が求められる。しかし、実際には虚構（フィクション）のものが入り混じっている。

道徳教材は、単に道徳的ねらいを達成する手段であるだけでなく、児童・生徒の知識の

一部になるという視点に立って、適切な資料を選択することが必要である。道徳教材を使用するとき、その内容の正確さに関して、2つの考え方がある。一方では、道徳教材はたとえ一部が誤った内容であっても、現実には存在しないようなことでも、児童・生徒の道徳的な理解を促したり、道徳的な判断ができたりするようになれば、かまわない。道徳教材のねらいが達成されれば、一部が脚色・創作されてもかまわないという考え方である。

他方、道徳教材は、できるだけ歴史的事実に一致すべきであるという考え方である。手に入る証拠に照らして、できる限り正確に道徳教材を引用したり、作成したりするという考え方である。

2つの考え方を比較すると、後者の事実に基づいて道徳教材を作成することが望ましいと判断できる。道徳教材として先人の伝記を取り上げる時に、正確さは道徳教材の具備する要件のひとつとして認めることが望ましい。

第1に、道徳教材が事実とは異なることを含むことは好ましくない。道徳教材は道徳的であるべきである。先人の生い立ちや業績に関する研究が進むにつれて、以前はわからなかったことや、いくつかの思い込みや間違いが指摘されるようになった。これらの事実を教材研究に生かすことが、教員に求められる。

第2に、児童・生徒に考えさせるためには、複数の視点から道徳教材を受け止めたり、疑問点を見つけたり、今後の課題の手がかりを与えたりすることが必要である。道徳教材は、正確な手がかりを含むべきである。道徳教材に誤りがあると、児童・生徒に考えさせる根拠が弱くなる。

第3に、道徳科が設置されたので、教科書を作成しなければならない。既に、2018年（平成30年度）から使用するために、教科書検定が実施された。教科書は広域採択をするので、多くの児童・生徒に影響を与える。教科書に誤りがあってはならない。何度も見直し、確認して、間違いのない教科書を作成しなければならない。時代考証の正確さも、当然ながら求められる。

## (2) 児童・生徒の生活体験との調和

実際に起きたことについては、事実をありのままに資料とすることができる。児童・生徒自身が登場人物の立場になった時、何ができるのか。実体験に基づく判断は、現実味を帯びたものになる。他方、虚構（フィクション）のものについては、児童・生徒は一層の想像力を働かせる必要がある。

読み物資料が虚構（フィクション）を含むことについては、L・コールバーグ（L. Kohlberg）の「ハインツのジレンマ」がある<sup>1</sup>。これは、妻ががんになったので、夫は薬屋が開発した高価な薬を盗むべきか、という内容である。小学生にこの物語を聞かせても、妻の存在を十分理解することができない。薬屋が開発した薬も現実的ではない。虚構（フィクション）を含む読み物資料を使用しても、児童・生徒に深く考えさせることが難しい。



### 3. 道徳教材としての読み物資料の問題点

「先人の伝記」のひとつとして二宮金次郎が取り上げられ、定番の道徳教材になっている。本項では二宮金次郎を例に論を進める。

#### (1) 二宮金次郎の人物描写の不正確さ

二宮金次郎の場合はどうか。二宮金次郎は実在し、多くの村の財政立て直しをしたことは事実であるが、道徳教材として取り上げるとき、いくつかの虚構（フィクション）が含まれている。二宮金次郎自身は出納帳を残しているが、自分の言葉で自分の考えを表していない。教えを受けた弟子たちが、二宮金次郎の言葉を書き留めたとされている。後世の人々が、二宮金次郎の言葉や行動を都合のよいように作り上げた可能性を否定できない。

二宮金次郎の資料の中で、生まれた状況や毎日の勉強について不正確な記述がある。第 1 に、二宮金次郎は貧しい農家の出身とされている。しかし、彼は 16 歳の時、7 反 5 畝 29 歩（2279 坪）を所有していた。没落したとはいえ、田畑を持たない小作人ではなく、田畑をある程度所有していた<sup>2</sup>。少なくとも二宮金次郎は貧しい農家に生まれたのではない。

第 2 に、「一日を終えると本を読み」とあるが、一般に言われるような『大学』ではなく、青少年期には、『実語教』を読んでいたことが指摘されている。二宮金次郎は、1807 年（文化 4 年）（二宮金次郎 21 歳）に『実語教』を購入し、1813 年（文化 10 年）（二宮金次郎 27 歳）に『大学』を購入している<sup>3</sup>。二宮金次郎は出納帳をつけていたので、本の購入の時期から読んでいた本を特定できたのである。さらに、当時の学習方法については、『実語教』などは声に出して読むよりも、暗記してそらんじるというやり方で学んでいた。

二宮金次郎を取り扱った道徳教材には、事実と異なる個所がいくつか存在する。道徳教材として、どこまで正確さを求めるかを問う時期に来ている。

#### (2) 二宮金次郎像に見る時代考証の不正確さ

二宮金次郎は勤勉の象徴として位置づけられ、1910 年（明治 43 年）に最初の銅像が作られたと言われているが、多くの小学校の校内に作られてきた。戦時中に金属の供出が求められた時や校地が整備されるときに撤去されたが、今また新しく設置する小学校もある。

二宮金次郎像は、道徳教材として事実に基づいて正確に作られているだろうか。二宮金次郎像が、二宮金次郎が生存していた時代を正しく反映させていれば問題はない。しかし、二宮金次郎像については複数のことが創作されており、真実ではない不正確な部分が存在している。複数の点で、二宮金次郎像は虚構（フィクション）の産物である。二宮金次郎

像は時代考証が不十分なままに作られているので、歴史的な事実と反する事柄が混在している。

第1に、二宮金次郎像のたきぎを背負っている姿は少年期とみられる。しかし、たきぎを採ることについては、成人後に伐採権を得た後に可能であった。たきぎの販売の記録は出納帳としての「日記万覚帳」に記載してある。このことから、二宮金次郎がたきぎを運んだのは、少年期ではなく、25歳から28歳の青年期であることが分かった<sup>4</sup>。

第2に、二宮金次郎像が江戸時代の服装にあってはいるかが、疑問である。もんぺなどの服装が当時のものであったかの時代考証が十分にされていないように思われる。道徳科で二宮金次郎像を道徳教材にすると、服装に関することにも気を付けるべきである。

第3に、二宮金次郎像のしょいこについては、天秤棒であるとの指摘がある。たきぎを天秤棒の前と後ろにくくりつけて運び、本は懷に入れていたことが指摘されている<sup>5</sup>。

第4に、二宮金次郎像は約1メートルの高さであるが、二宮金次郎の身長は182から186cmではなく、165から168cmであることが指摘されている<sup>6</sup>。

以上のように、二宮金次郎像には、複数の不正確な部分や正しいと判断されていないことが含まれている。道徳教材として二宮金次郎像を取り上げる時には、できる限り歴史的な事実と忠実でなければならない。教員は、道徳教材のひとつとしての読み物資料の内容を十分確認しておかなければならない。このことを道徳教材の具備する要件のひとつとして認めるべきである。

現在では二宮金次郎に関する研究が進み、その実像が次第に明らかになってきた。等身大の二宮金次郎をモデルにして、児童・生徒の判断力を鍛えるべきである。二宮金次郎の研究の成果に基づき、できるだけ正確な読み物資料を作成することが望まれる。

### (3) 現代の視点からみた教材の不適切性

二宮金次郎像の歩きながら本を読んでいる姿は、現代の児童・生徒にとって真似できることではない。教員はこの像から「勤勉」を学習してほしいと意図して示すが、児童・生徒が必ずしもそのようにイメージするとは限らない。ある年代以上の者にとって評価が固定している教材に頼ると、児童・生徒はその意図から離れて、現代社会の実情に合わないことを学習することにもなる。

最近では、歩きスマホが危険という理由から、座って本を読む二宮金次郎像も建てられている。しかし、座像は仕事を中断して読書をする姿であり、「勤勉」という道徳的価値を表しているとは言いがたい。勤労と勉強の2つの価値のうち、勉強だけを取り上げている、あるいは漫画や軽い読みものを読んで休憩している姿に思えるかもしれない。暗黙の裡に現代社会で模倣してもいいことと悪いことを選別しなければならない賢明さが求められる。

#### 4. 「先人の伝記」を道徳教材として取り上げる時の要件

「先人の伝記」を道徳教材として取り上げる時の要件とは何か。「要件」とは、大切なことや必要なことを意味している。道徳教材として取り上げる時の要件は、その内容の適切性を考えることである。2017年（平成29年）6月の小学校学習指導要領「第3章 特別の教科 道徳 第3 指導計画の作成と内容の取扱い 3 (2)」において、教材の留意事項が述べられているが、この留意事項は読み物資料として備えるべき要件であると理解できる。

「教材については、教育基本法や学校教育法その他の法令に従い、次の観点に照らし適切と判断されるものであること。

ア 児童の発達の段階に即し、ねらいを達成するのにふさわしいものであること。

イ 人間尊重の精神にかなうものであって、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題も含め、児童が深く考えることができ、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものであること。

ウ 多様な見方や考え方のできる事柄を取り扱う場合には、特定の見方や考え方に偏った取扱いがなされていないものであること。」

ここでは、「ねらいの達成」、「人間尊重」、「偏った取扱いがなされていないもの」が道徳教材として適切であるとされている<sup>7</sup>。

「ねらいの達成」については、学習指導要領の中の道徳科の目標にそったものでなければならない。

「人間尊重」については、歴史上の人物を取り上げれば「人間尊重」になる。他方で、実験動物の虐待ということを道徳教材にすると、「人間尊重」にならない可能性がある。人間の病気を治療するために、動物を実験に使用することは、動物の生きる権利を阻害している。取り上げる道徳教材によっては、「人間尊重」が成立しないこともある。

「偏った取扱いがなされていないもの」については、「多様な見方や考え方のできる事柄」をひとつだけの見方や考え方で判断しないことを意味している。「多様な」という言葉は、複数あることを示している。複数の見方や考え方を理解すれば、偏りのない取り扱いになる。このような考えは、「多面的・多角的に」思考することにもなる。

以上のことを考慮して、「先人の伝記」を道徳教材として取り上げる時の要件を考えてみよう。

##### ① どのようなねらいを達成するのか。

ねらいは、目標をさらに具体的にしたものである。先人の伝記を道徳教材として使用する時、ねらいや内容項目との関連付けを考えなければならない。どのようなねらいを達成



するのか。学習指導要領の中の道徳科の内容項目の何を取り上げ、指導するのか十分な検討が必要である。

ねらいについては、学習指導要領の中の道徳科の目標に準拠しなければならない。小・中学校の道徳教育の目標は、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育成することである。道徳的な判断力を目標とする場合、児童・生徒が先人の考え方や行動の善悪を判断することを学習することになる。道徳的な心情を目標にする場合、「善を行うことを喜び、悪を憎む感情」を育成することになる。児童・生徒は他者や社会にお金を融通するという他譲を喜びとできるのか。実践意欲と態度を目標にする場合、それらを身に付けることが目標として位置付けられる。

目標については、方向目標と到達目標がある。方向目標は、児童の成長を方向付ける目標であり、評価が難しい。到達目標は、共通に達成すべき到達点を記述する目標であり、比較的评价がしやすい。

先人の実践から児童・生徒は何を学び、どのように行動しようとするのか。先人の伝記を道徳教材として使用する時には、どのような目標を実現するために取り上げるのかを考えておかなければならない。そうすれば、なぜ道徳教材として取り上げたのかの理由が明らかになる。

## ② 道徳科の内容項目の中で、どの項目と関連付けるのか。

ねらいと内容項目は結びついている。どのようなねらいを設定するかにより、取り上げる内容項目も異なってくる。小学校の道徳科の内容項目の中で、どれを取り上げるかは、何を指導するかというねらいと関連している。

小学校の道徳科の内容を端的に表す言葉を列挙すれば、次のようになる。

「①善悪の判断、自律、自由と責任、②正直、誠実、③節度・節制、④個性の伸長、⑤希望と勇氣、努力と強い意志、⑥真理の探究、⑦親切、思いやり、⑧感謝、⑨礼儀、⑩友情、信頼、⑪相互理解、寛容、⑫規則の尊重、⑬公正、公平、社会正義、⑭勤労、公共の精神、⑮家族愛、家庭生活の充実、⑯よりよい学校生活、集団生活の充実、⑰伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度、⑱国際理解、国際親善、⑲生命の尊さ、⑳自然愛護、㉑感動、畏敬の念、㉒よりよく生きる喜び」

たとえば、二宮金次郎の伝記を道徳教材として取り上げるとき、「勤勉」の他にも、該当する内容項目が複数存在している。この教材は、内容項目の「正直・誠実」、「友情・信頼」、「相互理解・寛容」「家族愛・家庭生活の充実」「国や郷土を愛する態度」などと関連付けることができる。

ほとんどの内容項目は人間として身に付けることが望ましいものであり、人間尊重の精神にそったものである。「善悪の判断・自律・自由と責任」などは、人間社会の一員として生活を営む上で必要なことである。

一方、「自然愛護」は、たとえば、人間のため木を伐採することよりも、森林を守り育てることを重視する言葉である。人間の生活に役立てるために木を伐採することは、人間尊重の精神に基づいている。しかし、開発の名のもとに、かなりの森林資源が失われているのも事実である。絶滅危惧種の生物を守るためには、森林の伐採を制限したり、植林したりすることが大切である。このように、「自然愛護」は人間尊重の精神にそって開発することより、地球規模で動植物を守ることの方を優先するのが望ましい。どの立場に立つかによっては一義的に取り上げられない項目もあり、ねらいをどこに置くかを十分に検討する必要がある。

③ 伝記で取り上げた人物の思想や業績の中で、何を教えるのか。

先人の伝記を読み物資料として使用するなら、その人物の思想や業績の全体を知っておかなければならない。その中の一部分だけを取り上げると、正しい理解ができない恐れがある。道徳科の内容と関連して、先人の思想や業績の中で、何を道徳教育の教材として取り上げるのかを考えるべきである。ひとつの教材について、単一の項目だけに偏った解釈をしないことも大切である。

また、先人の行動を実践するのか、それとも思想を学ぶのか。教材の主人公が実践したことをそのまま真似することは有益か。主人公が生きていた時代の行動様式をそのまま真似することは難しいし、必要がないであろう。

一方、先人の思想を学ぶことは可能である。時代に合った考え方や行動が求められるので、現代に適したやり方で実行すればよい。先人の思想を学ぶことは、児童・生徒がよりよく生きる方法を学習するのに役立つであろう。

思想や業績に優れた先人の伝記を学ぶことは、人間尊重の精神を学習することにもなる。医学の発展に尽力したり、貧しい人や病気の人の世話をしたりすることは、簡単に誰でもできることではない。強い意思を持って、自分のできることを実行することは称賛に値する。先人の優れた思想や業績に触れることにより、児童・生徒が自分は何ができるかを考えるようになれば、先人の伝記を学ぶ意義があると言える。

④ 児童・生徒の発達段階を踏まえて、何学年で誰の伝記を取り上げるのか。

先人の伝記を取り上げるときには、児童・生徒の発達段階を考慮しなければならない。発達段階を考慮することは、先人の伝記の中身を理解できるかどうかと関係している。伝記の中身を理解できるのか、使用されている言葉は既に知っているかを問うことになる。伝記の中身が理解できなければ、興味・関心を持つことも難しく、知的好奇心や想像力をかき立てることもない。先人の伝記を取り扱った読み物資料を使用するときには、中身の難易度を考慮するべきである。

読み物資料を何学年で使用するかは、他の教科、総合的な活動、特別活動の内容との整



合性を図り、関連する事項をどの程度学んだかによって決定する。たとえば、「生命の尊さ」に関する伝記を道徳科で取り上げるとき、理科や社会科、総合的な学習の時間、特別活動で生命について学んだことを事前に確認しておくことが必要である。

誰の伝記を取り上げるかについては、現在まで蓄積されてきた伝記がある一方で、新たに発掘される伝記もある。特に、郷土で有名な先人の伝記は、地域に根ざした教育を進めることにもなる。

児童・生徒の発達段階に即することは、人間の一生にわたる成長を見通すという点で、人間尊重の精神と関係している。児童・生徒は、自分がどのように成長していくかを自ら考えていくことを奨励されている。この成長は、自分や人間社会にとって望ましい価値を実現していく過程でもある。人間社会の中で生きていくことは、自分と他者とコミュニケーションを図りながら一緒に生活していくことを意味している。自分と他者は、互いを尊重することが求められている。

⑤ 「考え、議論する道徳」を実施するためには、どのような工夫をするのか。

先人の思想や行動をそのまま教えることは、知識を増やすことに役立っても、「考え、議論する道徳」にはならない。たとえば、小学校低学年にできそうなことを考えさせたり、議論させたりする。その際、道徳を担当する教員の工夫が必要となる。では、教員はどのような工夫をすればよいのかを考えてみよう。

第1に、児童・生徒に考えさせるためには、なぜそうなるのかの理由を考えさせるのが良い。登場人物はなぜそのような行動をしたのかなどの問いは、その理由を児童・生徒に考えさせる意図を持っている。読み物資料については、その内容を児童・生徒に理解させたうえで、教員は児童・生徒に考えさせるための質問をする。

第2に、読み物資料の主人公だけではなく、他の登場人物の立場になることを考えさせる。異なる立場になることは、「多面的・多角的に」考えさせることである。また、賛成側と否定側に立った話し合いをするときには、児童・生徒が信ずるのとは異なる立場に立って考えさせる。

第3に、グループで話し合いをするとき、自分の意見と他者の意見を比較することもよい。比較した結果、それでも自分の意見が正しいとするか、他者の意見の方が正しいとするかを考えさせる。考えさせることは、自分の意見に対しても、疑ってみることが大切である。

第4に、問題解決型の授業では、問題の解決策を児童・生徒に考えさせる。解決策は複数あるかもしれない。複数の解決策の中から、児童・生徒が正しいと思うものを選択させる。大切なことは、複数の中からひとつを選択させることである。児童・生徒になぜそれを選択したのかを聞くことは、言うまでもない。

教員の工夫はひとつではなく、複数ありうるので、道徳科の授業で、教員は絶え間なく工夫することが求められる。

⑥ 読み物資料の内容は、どこまで正確さを目指すのか。

前述の通り、道徳教材として先人の伝記を取り上げる時に、正確さは道徳教材の具備する要件のひとつとして認めることが望ましい。しかし、読み物資料の内容の正確さについては、従来取り上げられてこなかったし、問題にもされてこなかった。読み物資料が備えるべき要件の中にも、資料の正確さは入っていない。「先人の伝記」は、過去に実在した人物を取り上げているので、歴史的事実が存在するはずである。何らかの証拠によって、「先人の伝記」が語られたり、文字で記述されたりしたと理解できる。しかし、読み物資料には、実際に起きたことや虚構（フィクション）のものが入り混じっている。

道徳科の授業で使用する「先人の伝記」に関する読み物資料は、歴史的事実に基づかなければならない。では、どこまで正確さを求めるのかという問題が出てくる。道徳教材として読み物資料を使用する前に、教員自身がその内容の真偽を確認しなければならない。研究の成果として次々に新しい事実が発見されているので、最新の研究成果に基づいた正確な内容の読み物教材を作成しなければならない。

## 5. 「考え、議論する道徳」への質的転換

2015 年（平成 27 年）の一部改正学習指導要領では、従来の「読み物道徳」から「考え、議論する道徳」へ質的転換を図ることが目指されている。問題解決型の学習や体験型の学習を通して、「自分ならどのように考え、行動・実践するか」を児童・生徒に考えさせる。これは主体的・対話的で深い学びを具現化するものであると理解できる。主体的・対話的で深い学びはアクティブ・ラーニングを言い換えたものであるが、アクティブ・ラーニングという言葉は学習指導要領では使用されていない。

中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」（2014 年（平成 26 年）10 月 21 日）によれば、従来の道徳の指導は、次のように批判されている。

「道徳教育の指導方法をめぐっては、これまで、たとえば、道徳の時間において、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があることや、発達の段階などを十分に踏まえず、児童・生徒に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業になっている例があることなど、多くの課題が指摘されている。」

児童・生徒にとって、道徳の授業はつまらないものであった。従来の授業では、答えはひとつであり、児童・生徒は自分の意見ではなく、その答えを言うことが多かった。児童・生徒は、教員の期待する答えを知っていたのである。

小学校学習指導要領「第 3 章 特別の教科 道徳」の目標には、物事を多面的・多角的に考えることが記載されている。「考え、議論する道徳」は、「先人の伝記」を道徳教材として取り上げる時にも適用できる。児童・生徒は先人の心情を推測するだけでなく、自

分自身を登場人物の立場に置き換えることによって、登場人物の行動の意味や思想を考えることを学習する。それによって、道徳的判断のもとによりよく生きることを主体的に学び、自己の生き方を深く考えることが期待できる。

問題解決型の学習や体験的活動は教員の力量が問われる指導方法である。しかし、先人の伝記を、児童・生徒にとって真に役立つ教材として生かすためには、教員の努力や工夫が必須である。先人の伝記は、すでに評価の定まった人物を通して道徳的価値を学ぶ機会である。先人の思想や行動から得ることが、現代社会に生きる児童・生徒に共感を呼ぶものであれば、十分に有用な教材であると言える。

\* 本論文は、2016 年度 JSPS 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）、基盤研究(c)、課題番号 16K03243「現行学校教育における『伝統文化』の分析及び活用の可能性についての総合的研究」（研究代表者は関西福祉科学大学高木史人教授）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 注

- (1) L・コールバーグの道徳教育論については、下記参照。

伊藤利明、『現代の道徳教育』（中部日本教育文化会、2016 年）60～82 ページ。

- (2) 二宮康裕、『二宮金次郎正伝』（モラロジー研究所、廣池学園事業部、2010 年）37～38 ページ。

- (3) 同上、54～56 ページ。

『実語教』は、江戸時代の寺子屋で使用されていた教科書のひとつである。「山高きが故に貴からず。樹有るを以て貴しとす。」から始まる。

齋藤孝、『子どもと声に出して読みたい実語教』（致知出版社、2013 年）

- (4) 二宮康裕、『二宮金次郎正伝』、前掲書、56 ページ。

- (5) 木暮正夫、『おもしろくてやくにたつ子どもの伝記 18 二宮金次郎』（ポプラ社、1999 年）161 ページ。

- (6) 二宮康裕、『二宮金次郎正伝』、前掲書、1～2 ページ。

- (7) 『小学校学習指導要領解説 道徳編』は、道徳教材の要件を次のように示していた。

「道徳の時間に用いられる教材の具備すべき要件として、まず次の点を満たすことが大切である。

ア 人間尊重の精神にかなうもの

イ ねらいを達成するのにふさわしいもの

ウ 児童の興味や関心、発達の段階に応じたもの

エ 多様な価値観が引き出され深く考えることができるもの

オ 特定の価値観に偏しない中立的なもの」

文部科学省、『小学校学習指導要領解説 道徳編』（東洋館出版社、2008 年）、93 ページ。

（伊藤 利明：名古屋経済大学名誉教授・道徳教育）

（石村由利子：四日市看護医療大学大学院教授）



